



写真1 辰野金吾 明治・大正期の建築家。工部大学校（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を卒業。英国人ジョサイア・コンドルに学ぶ。日本銀行本店本館のほか、東京駅などの日本を代表する建築物を数多く手掛けた。

壮大な緑門で飾り付けられた新本店の落成式



日本銀行の建物

その歴史と変遷について

1

本店本館の誕生

日本銀行文書局技師 中村茂樹

日本銀行本店の本館建物は、辰野金吾（写真1）の設計により、明治二十九年（二八九六）二月に建築されました。日本人建築家による最初の国家的建築として日本の建築史を見る上で極めて重要な建物です。昭和四十九年（一九七四）には、国の重要文化財にも指定されました。

日本銀行の建物としては、この「本店本館」以外にも、大阪支店の旧館、旧小樽支店、旧広島支店、また、現在は日本銀行が所有しておりませんが、旧京都支店、旧松江支店、旧岡山支店なども、建築史を見る上で重要な建物です。今回、五回の連載により、日本銀行本店本館をはじめとする日本銀行の建物の建築上の特徴や歴史をご案内していきます。第一回目は、本店本館が誕生するまでを概観していきます。

開業時の建物

日本銀行は、明治十五年（一八八二）十月、隅田川下流の旧永代橋（現在の日本橋箱崎町）のたもとにあった「旧北海道開拓使物産売捌所」（写真2）の建物を本店として開業し

ました（図1）。同年二月に廃止された北海道開拓使の建物を政府から借用した仮店舗でした。

この建物はベネチアン・ゴシック様式のレンガ造り二階建て、英国人ジョサイア・コンドル（注1）の設計により明治十四年（一八八二）に建築されたものです。ちなみにこの建物の設計には後の本店本館（以下、「本館」）を設計する辰野金吾も工部大学校の学生としてかかわっています。辰野金吾と日本銀行のかかわりはここから始まっているとも言えます。

仮店舗は、この建物を当時の本

館として、周囲に営業場（木造二階建て）や金庫（土蔵造り平屋）などを急遽増築したものの、手狭感もあり、満足できる本店ではありませんでした。翌明治十六年には新たな本店移転計画が決定されました。

この建物は本店移転後も迎賓館的役割を務めましたが大正十二年（一九二三）の関東大震災で焼失しました。現在、この地に「日本銀行創業記念碑」（写真3）が建っています。

本店の移転場所

新たな本店、現在「本館」があるこの場所は、江戸時代に「金座」（注2）があった場所です。この場所が新本店の敷地として選ばれた理由は、周りに多くの金融機関が軒を連ね、常磐橋を隔てた大手町には大蔵省（現財務省）や紙幣寮（現独立行政法人国立印刷局）があり、連絡の便が良かったことが挙げられます。

日本銀行は、明治十八年（一八八五）から明治二十九年にかけて、

図2 日本橋の敷地地図
太線内は購入した敷地を示す。

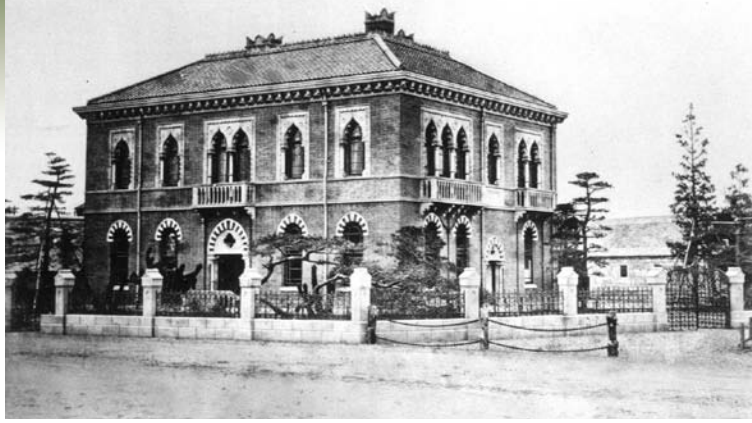


写真2「旧北海道開拓使物産売捌所」(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

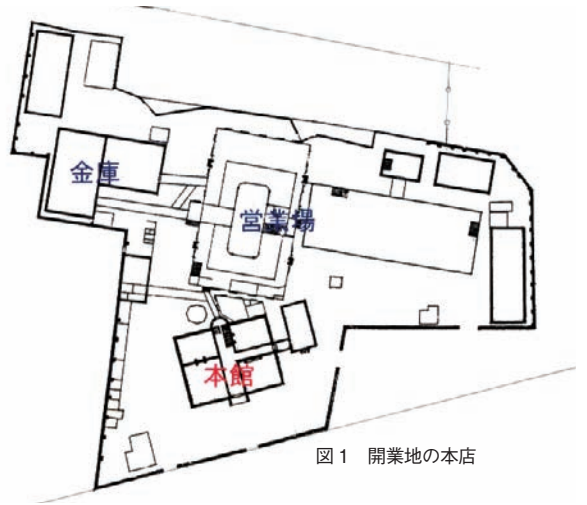


図1 開業地の本店



写真3「日本銀行創業記念碑」昭和57年(1982)に日本銀行創業100周年を記念して建立した。

当時の日本橋区本町一丁目、本両替町、本草屋町の土地約五三〇〇坪を三井組やその他の所有者から購入しました(図2)。

明治二十年(一八八七)ごろに日本橋川の常磐橋から日本銀行の敷地を写した写真(写真4)を見ますと、「金座」の跡地が小さな民家で占められているのが分かります。なお、手前にある常磐橋は現在も旧常盤橋としてそのまま残っています。

「本館」の設計

新本店の設計者はご承知のように当時の建築学界の第一人者であった辰野金吾です。辰野はインドルが育てた工部大学校の一回生で、当時三四歳の若さで工科大学の教授と臨時建築局工事部長を務めていました。

辰野は設計に先立って明治二十一年(一八八八)八月から一四カ月にわたり欧米に出張しました。

各国中央銀行の建物、特に日本銀行の諸制度の参考となったベルギー中央銀行をつぶさに研究し、新本店のモデルとしたといわ

れています。

明治二十二年十月に帰国した辰野が日本銀行に提出した設計図はネオバロック様式の石造大建築で、コンドル風のレンガ造りが全盛であった当時においては、まさにわが国における初の本格的洋風石造建築でした。

建築予算を大幅に超えていたため日本銀行内外で大議論になる中、時の川田総裁(注3)は「予算が一〇〇万円なればこそ、設計に辰野を採用した」として辰野を擁護したといわれます。

明治二十三年八月の株主総会において、「この建物は日本銀行の永久拠点となるものであり、特に『金庫は数百万の金銀財宝を蓄積する』ところであるから、世評にかかわらず、姑息に流れず、将来の発展を思い、堅牢、広大なものを造ることをご理解いただきたい」として政府と株主総会の承認を取り付け、総工事費八〇万円(最終的には一二二万円)の工事がスタートしました。

「本館」建設工事

工事は翌九月に始まりました。



写真4 常磐橋から見る本店建築前の日本橋敷地(明治20年ごろ撮影、日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

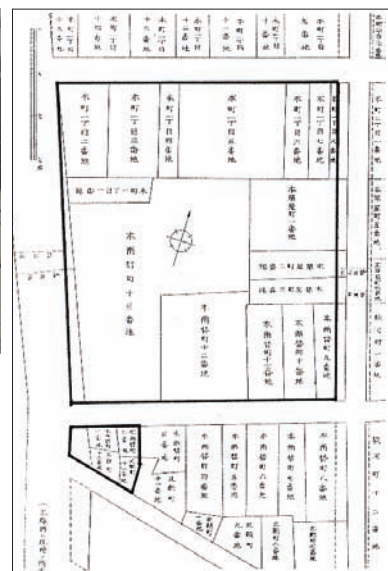
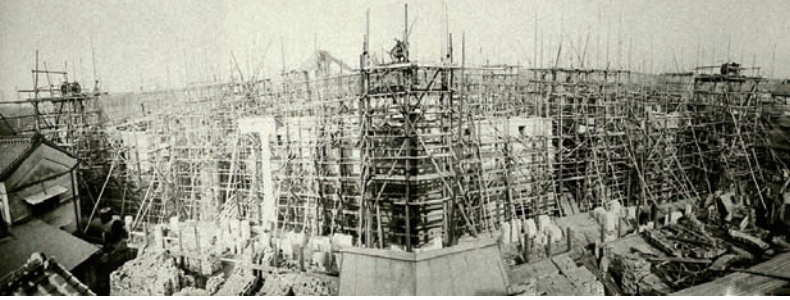


写真5(次頁)は着工約一カ月後の地盤工事(根切工事)(注4)を撮影したものです。先程の民家はすべて取り壊されています。また、後方には、清水組(現在の清水建設)二代目の清水喜助が手掛けた、三階建ての「為替バンク三井組」(現在の三井住友銀行日本橋支店)の建物が、さらにその向こう側に「越後屋」(現在の日本橋三越本店)が確認できます。それを除けば、



写真5 明治23年9月26日撮影 新店「本館」の工事は9月1日に地鎮祭を行い着工した。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



上から写真6 明治24年5月2日撮影/写真7 明治26年1月8日撮影/写真8 明治28年8月14日撮影(いずれも日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

まさに民家の中にこつぜんと巨大な建物を建てたということでしよう。

工事の過程を同一場所から定期的に記録した写真があります。最初の写真(写真6)は、基礎コンクリート工事が完了し、地下階の工事に着手した時のものです。写真に白く写っている部分はコンクリート底盤で建物の荷重を直接受けるために二・七メートルの厚さがあります。地盤が良好のため、一部を除き基礎杭は使われてい

ません。

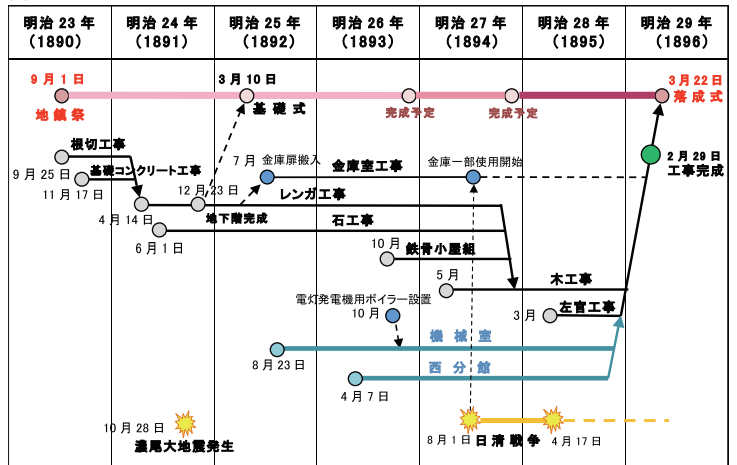
次の写真(写真7)は、一階外壁部分のレンガと石を並行的に積み上げる工事を写したものです。「本館」の構造は、外壁の内側にレンガを、外側に石を積み上げた石積みレンガ造りで、レンガと石は鉄棒で緊結されています。石の種類は、一階は「北木石」(注5)、二階・三階は「白丁場石」(注6)の二種類を使っています。三枚目の写真(写真8)は、外装工事がほぼ完成した段階のもの

です。写真からはやや分かりにくいですがロビー吹き抜け屋根が現在と異なっているのが確認できます。現在と異なる箇所についてはこのほかにも幾つかあります。その後ほど説明します。

建物がすべて完成したのは明治二十九年(二八九六)二月です。工事期間は足かけ七年にも及びました(図3)。もっとも、当初は明治二十六年(二八九三)末に完成する予定でしたので、二年以上遅れたわけです。

遅れた理由は幾つかあります。その一つに、明治二十四年(二八九二)の濃尾大地震が起きたことがあります。地震発生時には既に建物の基礎は完成していましたが、同様の地震が発生した場合は想定し、地上部分の設計を変更しました。具体的には、地上二・三階部分の石積み壁を薄く、さらにドームの背を低くすることで、耐震性を高める工夫をしています。このため、工事が明治二十五年(二八九二)まで中断し、完工時期が一年程度延長されました。もう一つの理由は、明治二十七年(二八九四)に日清戦争が始ま

図3



つたことです。これにより、職人や資材の調達が困難になったため、さらに一年以上の工期延長を余儀なくされました。余談となりますが、「本館」工事の「建築事務主任」には、後に日本銀行総裁となる高橋是清(注7)が任命されています。工事が思うように進捗しなかつたとき、高橋事務主任は工区を四カ所に分け、別々の親方に請け負わせました。期日までに完成したものに賞金を与え、遅延したものに同額の罰金を科すことにしたところみるみる進捗したとい

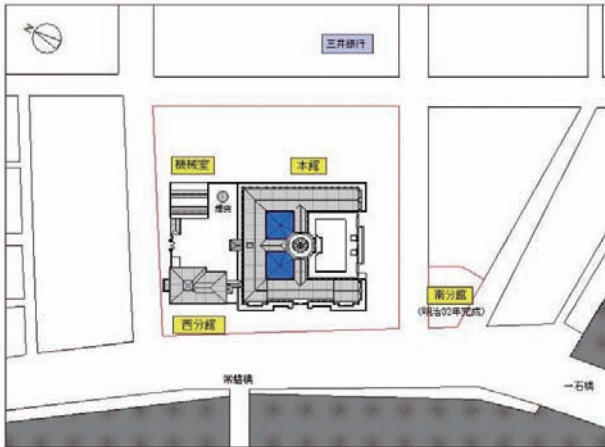


図4 「本館」竣工時の日本橋配置図



写真9 西側から見た新本店建物（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

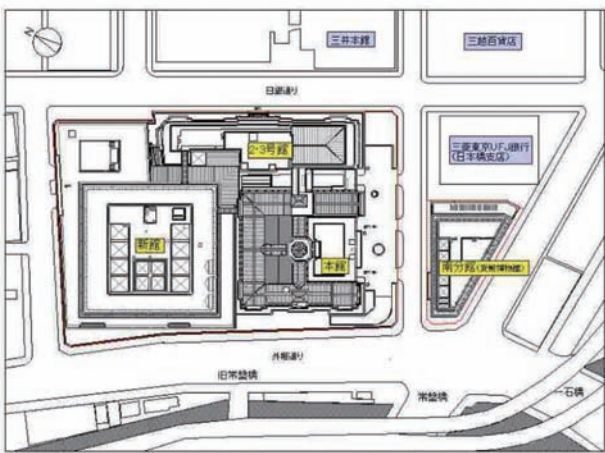


図5 現在の日本橋配置図

う面白いエピソードが残されています。

明治二十九年三月二十二日、足かけ七年の大工事の落成式(20ページ右上写真)を迎えました。当日まで高い板塀で隠蔽し一夜でこれを取り除きました。地下二階地上三階建ての石積みレンガ造りの建物が姿を現した時、二〇〇〇人を超える来賓は白い花崗岩のまぶしさとその威容に感嘆の声を上げたといわれます。

「本館」以外の建物

明治二十九年当時の建物群を

示したのが図4（現在の配置図は図5）です。三年後に完成した「(初代)南分館」を除き、新本店は「本館」、「西分館」、「機械室」の三つの建物で構成されています。

写真9は、西側（常磐橋側）から見たものです。右側の建物が「本館」、左側の建物が「西分館」、二棟の間に見える塔状の建造物が「機械室」の煙突です。

「機械室」は、「本館」用の電気や暖房用蒸気を供給するために「本館」建設と並行して造られました。

「西分館」は営業局第二課として「本館」の建設途中で増築した石積みレンガ造り二階建ての建物です。もつとも、「西分館」の方が「本館」よりも早く完成しています。

三年後の明治三十二年には、初代「南分館」も完成しました。「本館」完成後に建てられた最初の分館で、手形交換所および横浜正金銀行出張店として使用されました。

辰野金吾とその教え子で後年建築史家となる関野貞の共同設計による、石積みレンガ造り二階建ての建物です（写真10）。

その後も業務の拡大を受けて、東分館（明治三十四年築）等の付属建物を増築していきます。

今回は、そんな明治大正時代の「本館」の様子を紹介していきます。



写真10 南分館（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

(注1) 工部大学校（現在の東京大学工学部）の造家（建築）学科教授として、辰野金吾などの創生期の日本人建築家を育成し、明治以降の日本建築界の基礎を築いた。鹿鳴館（明治十六年）、三菱一号館（明治二十七年）のほか、岩崎家をはじめとする数多くの財界人の邸宅を手掛けている。

(注2) この敷地の中核は、旧幕政のころは金銀吹立所と世襲の金改役後藤家の役宅があった場所いわゆる「金座」の跡地だった。「金座」は、元禄十一年（一六九八）にこの地へ移り、明治二年二月の造幣局新設に伴い廃止され、その後民間に払い下げられた。

(注3) 第三代日本銀行総裁川田小一郎。明治二十二年九月～明治二十九年十一月（逝去）の間総裁を務め、「本館」建設に一番かかわりを持った。

(注4) 建物基礎や地下室を造るために地盤を掘削する工事のこと。

(注5) 岡山県笠岡市北木島町から産出される花崗岩。

(注6) 神奈川県湯河原町から産出される安山岩、花崗岩に比べて軟質。

(注7) 第七代日本銀行総裁。辰野金吾とは唐津藩藩校の教師時代に英語を教えた関係もあり、辰野が長く日銀建築にかかわるのもその深い因縁によるものともいわれる。